

## 一、八郎太郎

## 八郎太郎伝説

八郎太郎の伝説は秋田を中心として青森・岩手にも広がる、スケールの大きい物語である。内容も雄大で、はるか古代にさかのぼる幻想的な構成になっている。

むかし、草木の村に八郎太郎という大きくて力の強い若者がいた。毎日山々をかけまわり、マダの木の皮をはいだり鳥や獣をとって年とった父母を養っていた。

あるとき八郎太郎は仲間の若者と三人で、来満峠からずつと奥山を越え奥入瀬のあたりまで来て、マダの皮はぎにはげんでいた。八郎太郎が炊事の番のとき水を汲もうとして川ぶちへ行くと、岩魚を三匹見つけた。三人で一匹ずつ食べようと串にさして焼いていると、そのにおいの良いこと、自分の分をべろりと食べいつの間にか残りの二匹も食べてしまった。するとどが焼けるようにかわき、桶の水を飲んだがかわきが止まらない。川ぶちで水に口をつけ、日の暮れるまで休まずに飲み続けた。

ふと顔を上げると、水面に写る姿は火の玉のような真つ赤な目をした龍と変わっていた。八郎太郎は仲間にも、自分も魔性となり水から離れられなくなった、これからここへ湖を作る、家へは自分の笠とケラを届けてくれと頼んだ。そして三十余文(約九〇メ)の大きさとになり、沢から流れる水をせき止めて十和田湖を作り、深い湖の底に住む主となった。

一方、南祖坊という僧が紀州・熊野山で人々の救いを願って修行していると夢枕に老人があらわれ、願いを聞き届けるが、それには龍身となる必要がある、鉄のわらじと杖を与えるから杖のおもむくままに歩き、このわらじと同じものが見つかったとき、そこが願いをかなえる地となる、と語った。

南祖坊は津々浦々をめぐり歩き、十和田湖へ来た時、洞窟の中に鉄のわらじを見つけた。ここがお告げの場所かと、岩頭で経を読み始めると、湖底からさささと立ち去れとの大音声か響いた。神のお告げで自分が湖の主になると告げると、八つの頭と十六本の角を持つ巨大な龍があらわれ、火をふく舌を捲きあげて飛びかかってきた。

南祖坊が静かに経文を読むと、その一字一字が剣となつて八郎太郎の蛇体につき刺さった。そして経を衣の襟にさすと南祖坊も九頭の龍となつて戦う。八郎太郎は着ていたケラの毛一本ずつを小さい龍にしてかみつかせる。激しい闘いは七日七晩におよんだが、ついに八郎太郎は真つ赤な血を流しながら御倉半島をはい上がり、逃げ去った。五色岩、千丈幕、赤根岩が赤いのはその血の跡である。南祖坊は最も深い中の湖にひそみ、湖の主となった。

さて取れた八郎太郎が生れ故郷へ帰り、高い山へ登ってあたりを眺めると、西の方で米代川、小坂川、大湯川の三つの川が合流する、男神、女神のせまい谷あい目についた。そしてあの谷間を埋めて三つの川の水をためれば、大きな湖もできると考え、毛馬内の茂谷山を運ぼうとブドウやフジのツルを集めて長い綱をない始めた。

鹿角の四十二人の神々はこれを知って驚き、大湯の下の方に集まって評定した。集宮の地名はこのことによる。そして八郎太郎へ石のつぶてをぶつけることに決め、石を切り出すために花輪福土の日向屋敷にいた十二人の鍛冶にカナヅチ、ツルハン、タガネなどを沢山作らせ、牛につけて集宮まで運ばせた。あまり重たいので血を吐いて死ぬ牛がおり、そこは血牛一乳牛と呼ばれている。これに気づいた八郎太郎は、あきらめて茂谷山の中腹にかけた綱をほどいたが、その跡は今でも残って見える。

八郎太郎は米代川を下つて八郎瀧まで行き、そこの主となって暮らしたという。

(以上、「草木の八郎太郎」要約)

## 柴内の八郎太郎、ほか

市内にはこのほか多くの地域に、変化した形の伝説が語り継がれている。柴平地区東町(元柴内村)に伝わる物語によると、八郎太郎は十和田山へ修業に来る行者の案内

人をつとめ、その帰りまでの間にマダ皮はぎをしており、龍になったのはその時であった。

同地区小平での話によると、男神女神の間をせき止めるため大森山を動かそうとしたが、どうしても持ち上がらない。小平の薬師如来が、お前が背負っているのは黒龍神社の祭神・天乃手力男命だと教えると、あきらめて



第1図 八郎太郎生誕の碑（中草木）

茂谷山へ行ってしまった。

また曲田慶吉『伝説の鹿角』には、草木の八郎太郎は比内（現比内町）独鈷の大日堂別当の子孫と記されており、東町の言い伝えでは八郎屋敷と呼ぶ場所や八郎太郎が産湯に使った井戸があった。また柴内の人たちは八郎太郎が追われた十和田湖へは行かず、学校の遠足にも欠席したという。

八郎太郎が八郎瀉に行くまでについても、米代川にそった各地に多くの話が伝わっている。溪后坂（二ツ）でも湖を作ろうとして七倉の天神と力くらべをしたとか、神々が八郎太郎の作った土手に白ネズミを放って穴をあけさせたというものである。また田沢湖の主である辰子姫の伝説とも関連しており、姫と夫婦になって冬は田沢湖、夏は八郎瀉で暮らすことにしたために、田沢湖は冬も凍らないが八郎瀉は年々浅くなり冬に凍るのだとされている。さらに辰子姫をめぐって南祖坊と再び争い、この時は勝って十和田湖に追いついたという物語もある。

### 八郎太郎伝説の背景

この伝説に対しては、柳田国男など多くの研究者や文学者が注目してきた。八郎太郎が龍（大蛇）に変身するのは大地と一体になった象徴であり農耕の始まりと関連するといふ説や、南祖坊との争いは土着の原始宗教が後から入ってきた修験道に逐われたことを表しているといふ考え、八郎太郎はマガギであり、食べ物分不清ちあひ収穫を平等に分配するという生きるための厳しい掟を破ったため、異形の龍となったといふものなどがある。また大蛇の姿と化し諏訪明神として祀られている甲賀三郎伝説とも内容的に似ていることから、これが北へ伝えられて変形したものだといふ研究者もいる。

さらに地学的研究から、現在の十和田湖を形作った十和田山の噴火や磐石流、川にそって流れ下るシラス洪水のすさまじい有様が、そのまま南祖坊との闘いや八郎太郎の敗走の様子として現れたのだとする考えもあって、伝説の元は一つだけではないことを示している。

## 一、だんぶり長者

### だんぶり長者伝説

神秘的な変身や壮絶な闘いを伝える八郎太郎伝説に比べ、だんぶり長者伝説は穏やかでほんのりとした物語である。

むかし小豆沢の根本というところに、長牛から婿にきた若者が年とった父親と暮らしていた。正直で働き者だったが、いつも貧乏だった。一方、比内の独鈷という村に十六になる親孝行な娘がいた。両親が亡くなり悲しみにくれていると夢に白髪の老人があらわれ、川上へ向かうと一人の若者に会う、その者は人の二倍も働きの者に見える、その男と夫婦になるがよいと告げた。言われた通りにして小豆沢にたどりつくと、一人の若者が柴刈りをしており、一本刈ると二本刈れ、二

本刈ると四本倒れる程の働きぶりだった。夢の話をする男は娘を家へ連れて行って夫婦となり、仲良く暮したがあいかわらず貧乏だった。ある年のこと、神に供える餅も酒もなく若者がため息をついていると夢枕に老翁が現れ、我は大日神である、川上へ行き広いところに住むがよい、そうすれば長者となるだろう、と語った。妻も同じ夢を見たというので、次の日男は老父を背負い、女が物を持って川上へ向い、田山の奥の平間田という村で田畑を開いた。

夏の暑い日、畑で働いていた男がうとうとしていると、だんぶりが飛んできて唇にしっばをつけ、二回も三回もくり返した。目をさました若者はうまい酒を飲んだ夢を見たと言い、だんぶりの飛んでいった方へ行ってみると香りの良い泉がこんこんと湧いていた。飲んでみると本当にうまい酒で、飲んだ人は病気が直り、長生きできた。夫婦は国一番の長者となつて大きな屋敷を建て、集まってきた人たちが食べる米を朝晩とぐとき汁が川下まで白く流れ、その川は米白川（米代川）と呼ばれるようになったという。

さて二人はどんな望みもかなえられない身の上になったが、四十すぎても子供ができなかった。そこで大日神に祈願すると女の子が一人生まれ、かしこくかわいらしく育ち、秀子とも桂子ともよばれた。夫婦が長者の号を拝領するため桂子を連れて都へのぼった時、娘は天子の目に止まって宮中へつかえることになり、吉祥姫と名を変えて後には后となった。

そのうち長者夫婦は亡くなり、宝の泉もただの水となつて大勢の人々もばらばらになつてしまった。吉祥姫はそれを悲しんで天皇に願ひ、長者が尊んでいた大日神の社を古里に建てる許しを得た。そこで継体天皇十七年の年に小豆沢に大日堂が建立された。大日堂の祭堂が正月二日に行われるのは、長者が夢のお告げを受けた日にちなむとされている。

吉祥姫は亡くなる時に古里に埋葬してほしいと言ひ残したため、大日堂の近くに墓を作りイチョウの樹を植え、吉祥院という寺が建てられた。五番目の皇子で五ノ宮皇子とよばれた子供は母親をしい鹿角までやって来て、大日堂の後ろにそびえる山へ登りそのまま姿を隠した。この山を五ノ宮嶽とよび、その乗馬が石になったものがばくだ石、お供の兄弟がやはり石になったものが一の皇子（皇子石）、後から皇子を捜しに來た乳母夫婦が変わつた石が夫婦石などと呼ばれ、今でも登山道にある。

〔大日堂由来記〕等による。

### 長者伝説の背景

正直者が神の使いにみちびかれて長者になるという型は多くの地方に伝わっており、また靈泉発見の話も同様である。一方伝説の基になつた長者は実在したという意見もあり、田

山（現岩手県戸部安代町）には長者屋敷の礎石が残っていたという。

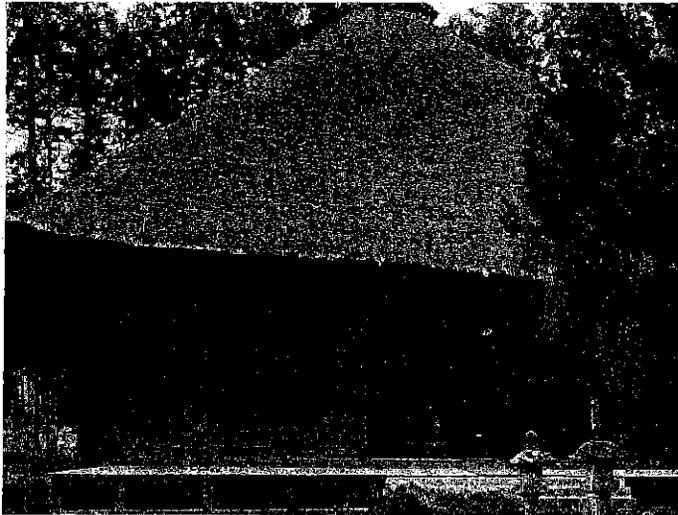
この地方に多く産した漆や砂金を基に長者になつたのだろうという説もあり、砂金を取る際に粘土質の土が川を白く染め、これが米代川の名に通ずるともいわれている。さらに川にそつた鉾山や温泉発見の由来も、だんぶり長者と関連して語られることがある。

いずれにせよ伝説そのものがまとまつた形で物語られるようになったのは、奥浄瑠璃を語り歩いた盲目の法師たちによると思われる。奥浄瑠璃本『檀毘盧長者之本地』などが今に伝えられており、鹿角を訪れた菅江真澄や高山彦九郎などもこの伝説を書き留めている。

### 三、錦木塚

#### 錦木塚伝説

悲恋物語として名高いのが錦木塚の伝説で、古来より和歌や謡曲などに登場



第2図 大日堂（昭和初期）

してきた。なおここで言う錦木とは、五種類の木の枝を束ねたもので仲人木ともよばれ、縁組に用いられたと伝えられる。また鹿角はかつて狭布(京)の里とよばれ、狭布(細布)が特産とされていた。

今から千数百年前のこと、錦木のあたりを都から来た狭名大夫という人が治めていた。それから八代目の狭名大海には、政子姫というたいそう美しい娘がいた。姫は狭布の細布を織るのがとても上手であった。

そのころ、草木の里に錦木を売るのが仕事をしている若者がいた。ある日若者は赤森の市で政子姫を見て、心の底から好きになってしまった。毎日毎日、男は姫の門の前へ錦木を立てた。そのころは女の家の前へ錦木を置き、それを家の中へ取り入れるのが嫁に行っても良いという印とされていた。

若者は雨の降る日も風の吹く日も、雪の降る日も一日も休まず錦木を立てた。しかし錦木は一回も中へは入れられず、三年もの間ただ増えるばかりだった。政子姫は機織りする手を休めてそっと男の姿を見るうちに、若者が好きになっていった。しかし二人は身分が違いすぎ、また次のようなわけもあった。

五ノ宮嶽のてっぺんに大ワシが巢を作り、古川の里の方へ飛んできては子供たちをさらって行った。ある時、若い夫婦が我が子を失って泣いていると、みすばらしい旅の僧がそれを聞いて、鳥の羽をませた布を織って着せれば、ワシは子どもをさらえなくなると教えてくれた。そういう布は、よほど機織りが上手でないと作れない。そこで政子姫は皆から頼まれ、親の悲しみを自分のように思い、三年三月のあいだ観音に願をかけ身を清めて布を織っていたのである。そのため、嫁に行くという約束はできなかった。

若者はそんなことは知らずに毎日せっせと錦木を立てていたが、あと一束で千束になるという日、体がすっかり弱っていったため門の前に降りつもった雪の中に倒れて死んでしまった。姫もその二、三日後、あとを追うように死んだ。姫の父は二人をたいそう哀れに思い、千束の錦木といっしょに一つの墓へ夫婦としてほうむった。その墓のことを錦木塚といっている。

### 錦木塚伝説の広がり

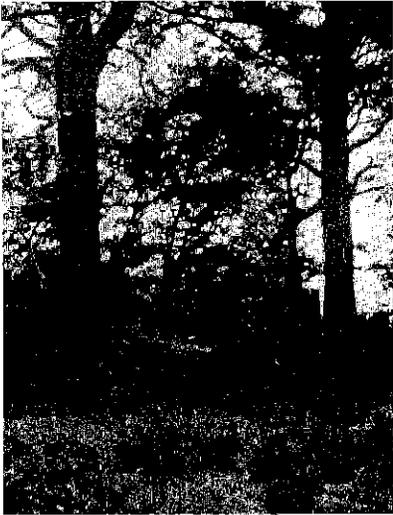
この伝説は古くから都にも伝わっていたらしく、和歌の題材である歌枕の一つとして、錦木は平安歌人の歌にもよく取り上げられた。能因法師、大江匡房などの歌が有名で

ある(『鹿角市史・第一巻』)。  
(三九九ページ参照)。

また室町時代の能作者・世阿弥の作とされる謡曲『錦木』は、旅の僧が細布を持つ女と錦木をかかえた男の霊に会って二人の恋の話を聞き、経をとなくて成仏させるといふ筋立てである。恐らく『袖中抄』などの歌学書にある錦木の伝説と、狭布の伝説をもとに構成したのでらうと言われており、これが正しいとすれば、現在伝えられている伝説の主な筋は世阿弥の芸術的な創作に由来していることになる。

江戸期には錦木が恋文と同義語となり、その文例集が『錦木』と名づけられるなど、この伝説は大きな広がりを持つ。

### 第3図 錦木塚



また願いをかなえるため、ある所へ百度または千度通うという話は一種の試練や信仰上の慣習と結びついており、小野小町伝説の中には小町の家へ百日通って愛を得ようとした男が九十九日目で死んだというものがあつた。これも謡曲などの素材となっており、それらの作品に比べると『錦木』の恋物語は素朴で救いがあると評されている。

## 四、鉾山伝説

## 光る怪鳥

鉾山の地であった鹿角にはそれにまつわる伝説が多く、なかでも最も栄えた尾去沢鉾山には、次のような話が伝えられている。

文明十三年（一四八二）のこと、尾去の村の奥の大森山から光るものが現れて飛びまわり、人を驚かした。昼間見ると羽の長さ十餘尋（約二〇メ）の鳥で、人を取って食わんばかりの勢い。口からは金色の火を吹き、鳴声は牛のほえるように山々に響き、山が崩れるようであった。人々は恐ろしくて生きた心地もしなかった。

この鳥は夜になると飛びまわって田畑を荒らすので、慈願院の別当や村人は毎晩一心に神に祈った。あるとき大森山の方から、あの鳥が泣き叫んだり苦しみ悲しがっているような声が聞こえ、それからは飛んで来なくなった。

村人が山へ登ると、赤沢川の水が朱を流したように赤くなっている。さらに行くところにあの鳥が赤く染まっとうつぶせになって死んでいた。頭は大蛇のようで足は牛のごとく、毛には赤と白がまじり所々に金と銀の毛が生えていた。背中と首に四つ五つほど大きな傷があった。腹をさいてみると、胃袋には穀物や草木は何もなく金・銀・銅・鉛の鉾石がつまっていた。

すると村長が、夢に老人が出てきて新しい山を掘れと六回もお告げがあった、これまでどの山のことか分からなかったが、この山のことではない、と言った。それで山を掘ってみると金・銀・銅・鉛がたくさん出た。田郡・赤沢・西道など鉾山が出た山一帯は大森山からの分かれなので、まとめて尾去沢とよぶようになった。

またあの鳥はどんな神が退治してくれたのかと探してみると、大森山のふもとに獅子の頭のような石があった。口にあたるところに血がついていたので、これがそうだとお堂を建てて祀り、鳥もここへ埋めた。これが大森親山獅子大権現のはじまりだといふ。

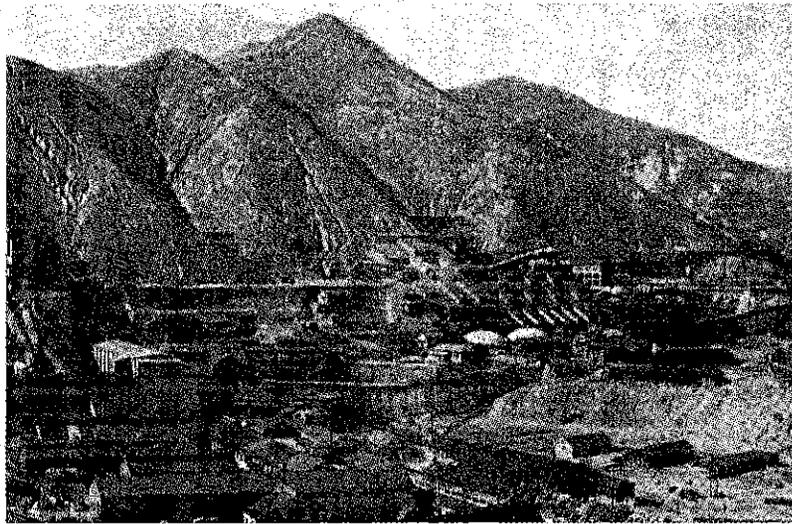
この伝説において、光る怪鳥は輝く鉾石、腹の中にあるのは鉾石が地中に埋まっていること、鳥が死んだ有様は山崩れ等による鉾脈の露出、赤い川は鉾物の成分が流れ出したもの、などと解釈することもできる。

## 鉾山発見伝説

この伝説のほかにも鉾山にまつわる話は多く、大部分は鉾山がどのような

にして発見されたのか、その由来や起源を伝えるものである。尾去沢のもう一つの伝説では、やはり神の使いの姫が鉾山のありかを教えてくれる。あるとき尾去沢の近くに不思議な美しい女があらわれ、佐藤清助という若者の家へ来て、この山の下を掘れ、あの山を掘れと教えた。そして世にも珍しい金というものが出てくるから、それを國主に差し出したらどうかという。清助はそれよりも女の方に興味があったが、女は自分は仙台の金華山の神の使いである、汚れた心を改めよと言いつつ消えた。女の言った所を掘ると金・銀・銅・鉛などが出てきた。

また尾去沢の一部である長坂ながさかに関し、やはり佐藤清吉



第4図 近代の尾去沢鉾山

という者が夢の中で唐獅子の格好をした神の使いに教えられ、きれいなものを手に入れたが、それが何か分らない。すると金山彦かなやまひこという老人がたずねて来て、それは金といって日本の国になかったものだ、ああいよいよ金の時代が来たと言ひ、水晶山の方へ飛び去った。清吉は金を天皇に差し出しほうびをもらった。

また和銅元年(七〇八)に初めて銅銭が作られたとき、銅を探そう命ぜられた役人達が大森山おほもりのふもとまで来ると、空に獅子の姿と梵天ぼんてんを持った大勢の人の姿が現れた。獅子が梵天を投げたその場所を掘ってみると、銅が出てきた。これが赤沢の梵天舗ぼんてんばの由来という。

白根金山しろね発見の伝説はかなり近年のもので、江戸初期の北十左衛門という歴史上の人物が主人公となっている。南部氏家臣の十左衛門が津軽との境を定めるため錦木の白根近辺に居をかまえた時、一人の老婆が訴え事を持ってたずねてきた。その手みやげの長いものを良く見ると、金色に光っている。老婆の願いをかなえてやると、村人の間にあの方は長いものが好きだ、長いものを持っていくと望みを聞いてもらえるかもしれないという噂が広がり、長いものを差し出す者があいつだ。そのどれにも金の砂がついており、いも畑を調べてみると一帯は砂金の産地であった。その後の十左衛門について、大坂冬の陣・夏の陣の際に南部氏にそむき大量の金を持って大坂城に入り、南部光り武者と呼ばれたことが史書に見えている。

## 五、マタギ伝説

### 左多六とシロ

山に住み狩猟を主な生活手段とする人々をマタギと呼ぶ。左多六さたろくとシロの物語も、そのマタギの生活と深くかかわっている。

むかし、下草木に左多六というマタギがいた。左多六は日本中どこでも猟ができる巻物(免状)を持っており、これは先祖の定六が源頼朝の富士の巻狩での功を認められて下されたものであった。

左多六はシロというとてもかしく、主人思いの猟犬を飼っていた。二月のこと、左多六はシロを連れて猟に出て、四角嶽しかづたけのふもとで大きなカモシカを見つけた。左多六は銃の引き金をひいたが、カモシカは血を流しながら逃げた。それを追ううちに、三戸との境の来満峠まで来ていた。とどめの一発を打ったとき三戸の方から五人のマタギが現れ、そのお境小屋が目に入らないか、勝手にほかの領内で猟をしてはいけないことは知っているだろう、とつめよった。左多六は逃げようとしたが捕えられ、三戸城に引きたてられた。シロはこっそり主人の後をついていった。

牢に入れた左多六は天下御免の巻物を忘れてきたことをくやしがり、明日は打首かため息をついた。シロは牢にしのび込み、やつれた主人を見ると一声吠えて風のように草木へ向かった。真夜中に、山も谷も飛ぶように走り抜け、火のついたように吠えた。左多六の妻は帰りの遅い主人の身を案じており、雪だらけのシロを見て驚いたが何をすれば良いか分からない。シロはまた遠い山道を越えてすぐすごと左多六のもとへ戻った。左多六はシロが巻物を持っていないのを見てがっかりしたが、力をふりしぼり、シロ、あの巻物だ、仏さんの引出しの巻物だ、頼む、と涙をためて言った。

シロは主人の気持が伝わったのか、一声吠えと再び草木へ走った。家へ着くとありったけの力をふりしぼって、仏壇へ向かって吠えた。その声は火を吐くように胸がさけるかと思われた。左多六の妻がハッと行って引出しをあげると、いつもは持つて出る巻物がある。妻は巻物の入った竹筒をシロの首に結びつけ、背中をなでながら見送った。

シロは疲れを忘れ、主人のために雪の来満街道をまた三戸めざして夜通し走り続けた。しかし峠を越したあたりで空が白みはじめ、明けの鐘がなったとき左多六の命はこの世から消えていた。お仕置場に捨てられた主人のそばにしばらく付いていた後、シロは三戸城の見える山の頂きに登り、恨みの遠吠を何日も続けた。それでこの辺りを犬吠森いぬいばやしという。間もなく三戸では地震や火事が続き、人々は左多六のたたりだと噂した。

罪人の妻は村におられず、シロとともに秋田領十二所の葛原くまがらへ移った。シロは村の人たちを助けたので老犬おきなさまと呼ばれ、死んだ時には村人が哀れに思い南部領の見える丘へシロを埋めた。今そこには老犬神社というお堂がある。

左多六さまと老犬さま

左多六伝説にはそれに付随する多くの物語がある。恨みをのんで死んだ左多六は恐ろしい荒神あらいがみになったとみなされ、左多六さまを呼び捨てにするとか、

四角獄の荒神をも家来にして使った、ガマ仙人に姿を変えて色々な奇蹟を見せた等々の話がある。またそれが生前のことも反映して、人に馬鹿にされたので呪文をとなえたら田植時に雪が降った、大きな山人やまびとを弟分にした、槍で石臼を突き通した等の言い伝えになっている。

またシロも葛原で大水の出た川へ飛び込んでおぼれている人を助けたとしてうやまわれ、犬の毛皮を着た者は渡し舟に乗せない、犬の爪皮のついた下駄をはいた娘が腹痛で動けなくなった、シロの死んだ所で馬が動かなくなった等と言われている。また葛原の若者が旅の途中でうなされて眠れず、見ると近くに犬の毛皮を着た者がおり、別の所へ行ったらゆっくり眠れたという話もあるが、明治の初めのこととされているので、かなり最近までの伝説が生活の中に浸透していたようだ。なおこの伝説のシロは、現在の秋田犬の元祖とも伝えられている。



第5図 左多六とシロの碑（下草木）

## 六、その他の伝説

鹿角にはこのほか大小の伝説が数多く伝えられており、『陸中の国鹿角の伝説』は四十七編を収めている。そのうちのいくつかの粗筋あらすじを示せば、次の通りである。

◎二戸のマガギが皮投岳かわなげだけへ登って下を見ると、広い土地と鏡のような沼が見えた。ここを住家すまかにしようとして、柴平あたりから鏡田の名の起りである沼の所まで田畑を開いた。これが鹿角開拓の始まりとされている。

◎花輪の赤石山あかしくま恩徳寺おんとくじには三体の仏像が安置されている。源義経が平家を攻めた時、鹿角からも四人の武将が従った。四人は屋島の合戦で討死し、その家来が主人の菩提をとむらうため持って来たのがこの仏像である。

◎八幡平の後生掛ごしょうがけには、すさまじい熱湯と蒸気の噴出する沼が二つある。ある若者がここで湯治をして一人の巡礼娘と知りあい、いつしか夫婦となった。ところが男には妻があり、後生掛をたずねて来てその有様を見、噴湯に身を投げた。娘も罪の深さを知りもう一つの沼に飛び込んだ。これをオナメ、モトメと呼んでいる。

◎東北に蝦夷えみしと呼ばれる人々が住んでいた頃、仁徳天皇の代に田道將軍たみちという大將が鹿角に攻めてきた。寺坂の下したの鹿角沢で闘いが始まり、田道將軍は毒矢にあたって死んだ。その墓の所に建立されたのが猿賀神社さるがである。地域の人は子供をしかる時に「しょうがんさまが来るぞ」といっておどす。

◎奈良時代、ある長者の息子と豪族の娘が恋仲になった。親どうしは仲が悪かったが、豪族は二人が死んだことにして逃がし、身がわりに二匹の馬を墓に生き埋めにした。旅を続けていた途中で、男が死ぬと娘は故郷に戻り夫と馬の真福を祈った。これが芦名沢あしなざわの観音堂の始まりで、絵馬が数多く奉納されている。



(5) 果てなし話

果てなし話 (1)

(2)

花輪・高屋  
用野目

出典・八幡平公民館編『村のむかし』、高橋節夫『鹿角のむかし』、今村義孝・今村泰子編『秋田むかし』、第二集、秋田県立博物館編『秋田の昔話』、東京経済大学民話愛好会編『民話調査ノート』、花輪町誌編纂資料調査委員会編『花輪町誌編纂資料・第二号』、『旅と伝説』掲載の内田武志報告、鹿角市「郷土学習教材」編集委員会「陸中国鹿角のむかし』、『鹿角市史民俗調査報告書・第一〜六集』他

※鹿角に伝わる昔話のうち主なものを取り上げた、採集地以外にも多くの集落・話者に伝えられている話もあり、それぞれ微妙な変化が見られる。集落毎の疎密は話者の偏在や調査の進度による。

## 一、動物に関する昔話

## 末娘とへび

動物に関する昔話には、動物が恩がえし等のため人間の嫁に来る話、逆に助力の報酬として娘がかえて広く伝えられている。

むがしむがし、娘三人もったえでとあっぱとあつたどしえ。五月もきて、田植えだごで、えちちえても、田さ水、いっべつ入ってえねがったど。

父、田のくろさえて、ひとりごと言ったど。「田さ、だが、水いっべい入れてければ、おりゃ三人娘もっていだたえに、どれでも、一人けるどもな。」

次の日、田さ、えってみたば、どの田もちょうどよく、水入っていたけど。そごさ「それ、おりゃ入れだおだ」と、せえの大きい、色の白い男きたけど。そりゃ白い大きい蛇であったど。して、その男「娘けるて、へつてらつどで、水いれだおだ」としえったど。

父、どれだつて、蛇さ嫁にという奴えねえど思つて、寝て起きねど。なんぼ、ままけつと、いっても寝て起きねえど。さきに姉娘いったごで「おれの言うごど聞いてくれれば、おれ起きるし、へでねば起きねえ」としえったど。

「なに、したであ」と姉娘、しゃべったば、父、「おりゃな、こうして、田さ水、入れでければ、おれえの娘けるつてへつたごで、蛇水へでけだ。うが、蛇さ嫁に行つてければ、おれ起きる」としえったど。「だありゃ、おれ、いぐであ」としえつて、枕ぼつぷりふんで、姉娘、えつたど。二番目の娘さも、しえつたば「だありゃ、蛇さいぐさ」としえつて、えつたど。

三番目の娘、あれ、あと一人だ。だれ、えってけるだかと、苦して、なまかもしんべえしてえだけど。三番目の娘、きたけど。「父、起きて、まませえ」「おれの言うごと聞でければ、まませし、へでねえば、おれ、ままもなも食わねで死なねばなんねえ」「なんしてえ」と、娘しえったど。「おれ、こうして田さ、水へねえたえに、田さ水へでければ、おれ娘けるってへったどで、水ひでけえだど。そりや蛇だどや」「ええ、おれ、へば、えぐ」と娘しえったどで、父、ゆっくりして起きて、まませってえだど。

日にちもたって、娘、嫁っこにえぐごとになったど。したば娘が「おれさば、なんもいらねえがら、糠えれた儀、千俵支度してける、あどなんにもいらねえたえに」としえったど。父、糠入れた儀、千俵、支度したど。したどで、その日、家さ、とまてえだば、蛇、むげえにきたけど。儀を蛇さくばらせたど。千俵なし、くばらせたど。

蛇えるとど、沼だど。その沼さ、その糠儀、入れねっばならねどし、島にかぐさねばならねえたえに、糠儀を沈めると思て、尾っぽもっておっつけ、はっぽもっておっつけたども、糠儀、なかなか、沈まねえけど。そのうち、蛇、おっつてしまて、死んだものみでえになったけど。して、その娘、家さもどつてきたっけど。どつとはらえ。

(毛馬内・湯沢ハル氏談、高橋節夫編『鹿角のむかし』2から)

八幡平地区に伝わる話では蛇が猿になっており、末娘は里帰りの時に猿に大きな臼を背負わせ、川につきでた枝の先の花をとらせる。枝が折れて猿は流れて行き、娘は家へ戻る。「美女と野獣」物語の一つで全国に広く分布し、蛇の話の方が古いとされている。蛇は田の神をあらわしているが、猿に変化するのには八幡平が山村地域であることと関連があるとも思われる。

#### その他の動物昔話

数として多いのが、狐や狸などに化かされたという話である。これには、はっきりした筋書を持ったものから、何か不思議なことがあり狐のせいだろうとする単純な伝聞まで

色々あり、時代も「昔むかし」からごく最近までの長い期間にわたっている。

内容的には、ほとんどが狐が人に化けてだましたり泥田の風呂に入れたり、悪戯をしたというものだが、物語性の強いものには何々狐という名前がついていて、長い間伝えられてきたことを想像させる。ここに登場する狐は実際の動物というより稲荷信仰や怪現象に対する畏怖の思いと結びついていると思われ、狐の出でくる別種の昔話である、化け狐を人間の知恵で退治した話や、ずるい狐が別の動物をだます寓意的な物語の方が、以前は沢山いたであろう狐と人間の関係をよく表していると言えよう。

そのほか、動物寓意譚である「さるかに合戦」、自分の家の飼い猫が仲間と一緒に人間のようにふるまっているのを見つける「ねこじゃおどり」、蛇に子供を殺された男が蛇を退治するが、自分も呪いで落命する「蛇のたたり」、戊辰戦争の時、鹿角原産とされる声良鶏の声を聞いた敵兵が、攻められたと思ひ込んで退却したという「声良鶏の話」などがある。

#### 二、精霊・妖怪に関する昔話

##### 山おばと牛方

山おばは昔話にしばしば登場する山の妖怪で、山の守り神的な面をあらわすこともあるが、ここでは恐ろしい化物である。牛方は牛の背に荷物をつけて運ぶ仕事をする人で、山間地帯の鹿角では馬よりも牛の方が運搬には適していた。

むがし、あるどに、一人の牛方えだけど。その牛方あ、山さ牛ばつてえて放して、小屋こさとまるおだけど。その日も小屋こさとまるどにして、ばんげまててで食たど。んだども、その日はまませへえあまつたけど。牛方あ、「こん

たらにままのごして、なげるに、もってえねえな。これ、やまおばさかしかえだらいがべなま」と思つて、大きだ声で「山おばやーえ、ままけら、来ーえ」とさがんだど。

したば、向こうの山がら、山おばあガリガリしはふんづげで、音立でではしえできたけど。牛方あ、「おりや、ままてえで食たけど、まま余つてしまた。もつてねえはえて、おめえさけるがら、食てしまえ」てへつたど。したば、山おばは、ガリガリと音立できるようにして、ペロツと食てしまつたど。そして、牛方さ「こればりこけるな。こればりこけるて、人よばたのな」とおごつたど。牛方あ「あど、ねおだ。余たたえにける氣になつてよばつたのだから、あどねおだ」てへると、山おばあ「こればりこけるて、人よばて。んだば、んがどども食てしまる」とへるたえに、牛方はおかなくなて「んやしたら、そごにべごえるたえに、そのべごでも食てけろ」てへつたど。したば、山おばあ、べごどごがりめがして食てしまつたど。

そして「まだ足えねえ。んがも食てしまる」てへたたえに、牛方はおかなくなてドンドンにげたど。そして、下の山のかやしばのかけさかぐえだど。ほてきた山おばあ、かやしばのどごさ来て「なんでもこのあたりさかぐえだな。出で来ーえ」てさけびながら、かやしばドットドットとおしてさがしたど。牛方は、はちこの方のかやしばさピッタリかぐえで「あだてけねばえや」て思つてえだども、とうとうしめえに、そのかやしばさ来たけたえに、牛方は仕方なくペロリ出はてしまつたど。したば、山おばあ「ごごさかぐえだな」てへつて、牛方どごつかめえで、ひっかつで、山の方さへでてしまつたど。

山おばのえさえだば、先にもう一人の牛方もつかまつて、かぐさえでらけど。そごで二人して、なんとがして逃げべしと、こつそり相談こしたど。先にえだ人あ「おばさん。おばさん、今日つかれたべんし。今日ねるどぎ、石のからどさ休むどがんし、金のからどさ休むどがんし」てへつたば、山おばあ「今日、頭あべええぐねはて、石のからどさねるじや」てへつたど。「したら」て、石のからどさねしえだど。山おばは、すぐゴーゴーていびぎけえでねでしまつたど。そごで

二人は「二人して、山おば殺してしまるべし」「どうして殺したらえがべ」て相談して、大きだ釜さ、湯ドンドンわがしたど。そして、あつ湯、山おばの耳のあなさ、ドッドとついでやつたど。山おばあ「あつ、あつ」てなきながら、死んでしまつたど。

「えあべえに死んでしまたども、このままだば、まだ生きてくるべえはて、焼いてしまるべし」てへつて、二人してドンドン火をてえで、山おばを焼いでしまつたど。したば、風あふいできて、そのあくボポーと散らがて、あくあかだのよかだのになつて、二人さかがつてきたけど。それで、山おばは、死んでも人を食うて言うわえだど。どつとはらえ。

(八幡平長嶺・阿部チャ氏談、「花輪町誌編纂資料第二号」昭和五十年収録)

山おばという存在は、農耕を主体とする里人の、風俗習慣の違う猟主体の山人に対する畏怖から生まれたともいわれている。山の神が変化したものともされるが、その一変型である男鹿地方のナマハゲの姿にも見られるように、異形の恐ろしい姿で現れることが多い。いずれも里とは別の空間で、冬などには荒々しく敵対的な様相を示す「山」そのものに対する感情が大きく影をおしていると思われる。全国的に分布している昔話の類型の一つである。

まんま食ねえあつば

どがある。

この昔話は市内各地に広く分布し、小さな変化も多い。男が妻の正体に気づく前半で終り強欲をいましめる言葉がついたり、最後の節句の由来の部分が強調されるものな

昔むかし、ある所に爺さまあつたけど。爺さま、わけやどき、まんまかねえあつばほしくて、皿つこで一つよりまんまかねえ、というあつばもらつたど。えで山さ行つてしまつと、あつばは大き釜さ水汲んで、米一俵あげて、飯たいたど。

そのできた飯をにぎりまんまにして、戸板さえっぺえあげで、髪ばドサツと前さたらして、頭のまん中さある大つき口あげで「太郎坊もけん、次郎坊もけん」と言つて、両手で投げこんで食つた。それ終れば水汲んで、釜洗つて、知らんぶりしておやじの来るの待つていだけど。

あるとき、おやじ、はりさ上がつて見てびくりにした。米俵が少なくなつていだんだ。おやじは山き行つたふりして、はりさ上がつてそつと見でれば、あっぱ鬼になつて大つき口あげでまんま食つてらけど。おやじたまげでしまつて、あっぱが水汲みに行つてらあいだに、はりさが下りできで、山き行つてきたふりして家さ入つた。あっぱ、しばらく家さやねでらだもの、家さあしびに行つてこい。みやげ何にしたらいがべ」と言つた。あっぱは「えつこ作つてくれ」と言つた。おやじは、えつこ作つてあっぱをやつた。あっぱは、おやじをえつこさ入れて、えつこごとかついで、山き向かつていだけど。

おやじは、どこでおりで逃げたらえべかと思つていた。したつきや、ヨゴシと菅浦がえつぺおがつてらどつてあつたけど。おやじは、えつこからおもいきつてとびおりて、ヨゴシと菅浦のなかさかぐれた。あっぱは鬼の姿にもどつて、おやじをさがしたども、ヨゴシと菅浦の汁つてつけば体くさるがらといつて、とうとうあきらめで山き逃げていだけど。「あっぱは、おそろしい鬼であつたじゃ」と、おやじはたまげてしまい、ヨゴシと菅浦をとつて、えさ帰つていだけど。どつとはえ。

(平成二年、大湯・安保マツエ氏談)

別例では最後に、それからというものの五月の節句の時には魔除けとして菅浦とヨゴシを戸窓に刺しておくのだと、年中行事の由来が説明されている。「食わず女房」譚として全国に分布しており、男が旅職人や物を売り歩く商人だったりするのが特徴の一つとされる。鹿角では八幡平長嶺の類話で男が麴売りとなつているものがある。

ここでも妖怪は山に住むことが示されている。この化物も時にはやさしく時には恐ろしい自然の力と考えることができるし、一方では心理的な解釈も可能だろう。なお文中のえつこ(エンツコ)とは、ワラで編んだ赤ん坊を入れておくカゴのようなものである。

### 三、人間に関する昔話

#### 粟ぶくと米ぶく

典型的な継子譚で、世界的に分布しており、日本では東北に類例が多いとされている。市内にもいくつかの形が伝えられており、姉妹の名は逆になつている場合がある。

むかし、あるどこにまます母がえだ。そして自分の子どもの米ぶくと、先妻の子の粟ぶくと暮らしてらけど。このまます母も、何しても米ぶくばりめごがて、粟ぶくばえじめてばりえるけど。ある日、二人さ「山さえて、くり拾つてこえ」と言いづけで、粟ぶくさば底さ穴のえでるこだしをたながせ、米ぶくさばええこだしたながせで「これさえつぺえ拾つてこえよ」と出してやたけど。

山さえたば、米ぶくは粟ぶくど先さ立で、やぶごがせでくり拾わせだ。粟ぶく、くりめけでこだしさへれば、くりもこだしの穴がらコロコロと落ちる。後ろにえだ米ぶくも、そのくりチャツと拾つて、自分のこだしさへる。まだ拾つてへればコロコロ、チャツと拾つて自分のこだしさためるけど。

そしてらうぢに、コロコロと落ちだくりこ、土の穴さコロコロとへでしまだ。くりこ「つども言えねえと思つて、二人してその穴こさへてえたば、おぐの方さ一人の婆さまえだけど。」ばさま、ばさま。こごさ、くりこころがてこねえけが「て聞いたば、くくりこよりも、んがだ、どしてこごさ来たのや。こごは鬼のえる穴で、いまに帰つてくれれば、んがだ、取つて食わえるだ」と、んがだ。

二人はどんでんして「んにゃ、どしたらえがべ」「どしたらえがべて、今鬼ども帰ってくるころだへて、もどつても行き合つてしまるべ。まんつ、おれのけつつの下き早くかくれる」てへつて、けつつの下きかくしてけだど。そこき鬼どももどつてきたけど。「や、なんだが人くせえな」「んだ、んだ。なんだが里くせえな」てへるので、ばさま「今しえ、里のすずめこ飛んできたけえ、んだたえに里くしえのだだ」「ほんたべがな」てへつて、そこらさがしてえだけ、「えねえな。ばばどて、転ばそが。けつつの下にえねえな」たば「年より転ばせば、後ろさまなくつぐだあ」てへつたど。鬼どもざらめで、まます食て、まだ穴がら出がけでえたけど。

ところがそのばばあ、大したしらみたがりて、背中だのけつつだのモソモソモソやつてらけど。米ぶくと粟ぶくあ「しらみ取つてけらあ」てへつて、大したしらみ取つてけだど。したば婆さま大した喜んで「えがた、えがた、大したえがた。したら、おめどさみやげけでやら。このはど、こつちの方は重でえはど、こつちの方は軽けはど、二人して好きだ方持つてげ」てへつたど。したば米ぶくは「おれあ、きつたえに、重でえはどこもらてえぐ」粟ぶくは「おれあ、よだこだたえに、どれでもえ。軽け方でもえ」て、二人してはどもらつて、家さ帰つてきたど。

えさ来て米ぶくあ、重でえはど開けでみだどが、中さんんだりかんだりのぶかれものばりへてらけど。米ぶくは「こんたらもの、けでよこして」ておごつてみな投げでましたど。粟ぶくも軽いはど開けでみだど。したば中さ、きれえだ着物だの、宝物だの、いっぺえ入つてらけど。米ぶくあ「粟ぶく、おめえのさ何へてらけあ」と聞ぐたえに「おれあのだておめえのだて、みなひとつだべね。ひとつづ人がら貰たおだもの。ましておらのだけあ軽いをだもの、わちかこしかへてねであ」てへつて、たんすさチャチャとしまてましたど。

そのうち花輪の祭りこきたけど。まます母あ、自分の子ばり連れでえぐ気なて、粟ぶくさ仕事のこり預けだど。庭さノロツと粟あひろげで「この粟、みんなおしておげ」てへつたど。またおぼけあじげで「風呂さ、じっぱり水汲んでおげ」てへつたど。そして米ぶくさばテラテラええ着物着せて、二人して町さ出がけでえだど。したどで粟ぶくあ「どうす

べねえ、おらも祭りこき行きてえたて、へでがねべし、どもさえねえな」て、まんじおぼけで風呂さ水くんたど。んだども、ジャーとまがてばりえで水さっぱりたまねえけど。そこ寺のおしようさんが来て「そえだば水たまねえだ。これ底さつめでくんての」てへつて、衣のそでもいで、おぼけの底ぶささでけだけど。それで粟ぶくあ、えつとごまにえつぺえ水くんてしまつたど。それがら、こんだ粟おしたども、ながながはげええがなくてらば、すずめこだあえつぺえ集まつてきて、チュンチュン鳴きながら粟おしし、羽こでバタバタやればポポと羽も飛んでしまるし、これもえつとごまにでぎでしまつたど。

えつけらえだ仕事が早く終つたので、粟ぶくもなんだて祭りこ見たくなつてきたど。それで婆さまからみやげにもらた着物を出して、きれえにかざて花輪さ出がげだど。町さえてみれば、まます母あ自分の子さばり何たり買つてけで、好きだもの食わせて、えきになつて祭りこ見で歩いでらけど。粟ぶくああんまりうしやらしぐななて、自分もなし買つて食で、そのかまじブーンとおつてやつたど。したば米ぶくが「あば、あば。粟ぶくも来てらじや」てへつたども、まます母あ「だれあ来るだけな。あのくれえのこり仕事言つて来たおだおの」てへるので「んだべがあ」てへつて、まだえ気なて祭りこ見でらけど。粟ぶくあ「あれあど、えさ戻るがもしねえな」と思つて、えつくりや祭りこ見で、先にえさけえて、ええ着物ばしまて、知らねえふりして、そこらかだづげだりしてえだど。えつとごましたば、二人帰て来たたえに、わんどと「おめえだえな。おめえどばり祭りこ見にえてきて」て、うらやましそうにへつたど。

次の日になつたば「粟ぶく嫁にたーもれじや。粟ぶく嫁にたーもれじや」てへつたど。「米ぶくだべねえ」て聞けば、「んにゃ、粟ぶく「米ぶくな」て聞だば、また「粟ぶく嫁にたーもれじや」てへつたど。「米ぶくだべねえ」て聞けば、「んにゃ、粟ぶくけでたもれ」てへるけど。この嫁もらえは村の大きえの人で、きな、粟ぶくあ一生懸命かせいだり、きれえーだ着物着て、大しだきれえだ娘こになつて祭りこさえぐど見だたえに「あれだば、おれあえさ嫁に欲しな」と思つて来たおだど。まます母あなんだて自分の娘の方をけてえと思つて「おれあえの粟ぶくの髪だきや、ジワリカブキリキリて、大した





主 査 奈良英尚 阿部正記  
主 任 間藤曉子  
嘱 託 安村二郎  
嘱 託 相川 積  
嘱 託 斎藤長八  
臨 時 村木照子

鹿角市史 第四卷

平成八年三月三十一日 発行

編 集  
発 行

鹿 角 市  
〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田四一  
〇一八六三〇一〇二二〇

印 刷  
秋田活版印刷株式会社  
〒011 秋田市寺内字三千刈一〇一